

『秘義分別撰疏』の考察（6）

千葉公慈

A Study about *Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā* (6)

Koji CHIBA

1. はじめに

本稿は、インドの瑜伽行唯識学派の思想的集大成ともいべき『撰大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下MSと略称)に対する重要な注釈書、『秘義分別撰疏』(Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā^{*1}、以下VGPVと略称)を考察の対象とするものである。すなわち唯識学派におけるアーラヤ識設定の隠された意味とその思想を開示せしめる貴重な手がかりを探るためにVGPVに関するチベット語訳デルゲ版(No. 4052)を底本として選択し、既に5回にわたって継続的に現代語訳^{*2}を試みたその続編である。

前回の拙論の要旨を述べれば、VGPVは煩悩障と所知障の二者を離れることが真如に他ならないという立場から、ただ無住处涅槃のみが大乘に独自の存在であると説き、三身説の解釈においては明確にその唯識派の特徴として、法が「性質」ではなく「性質を有する根拠」であるという隠された意味を主張しながら、法そのもの(dharma)ではなく、あくまでも法の背後にある基盤(dharmin)こそが肝要であり、複数の法でなく、それらを含む唯一絶対の単数体である法性こそが法身であると強調していた。こうした法の重層的解釈の背後には、密意として大乘には真の仏語性(Buddha-vacanatva)

*1 Don gsang ba rnam par phye ba bsdus te bshad pa (Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā) : Vivṛtti- in Derge ed. Vivṛta- in Peking ed.

*2 拙論『『秘義分別撰疏』覚え書(1)』駒沢女子大学研究紀要・第8号所収、pp. 209-216
同『『秘義分別撰疏』覚え書(2)』日本文化研究(駒沢女子大学日本文化研究所)・第4号所収、pp. 117-131
同「如来の所分別についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(3)』駒沢女子大学研究紀要・第9号所収、pp. 199-210
同『『秘義分別撰疏』における真如観について』平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会(佛教学部)、2003.9.6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp. 373-376
同「所分別と三昧についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(4)』駒沢女子短期大学研究紀要・第37号所収、pp. 79-85
同「唯識説における Buddha-vacanatva について—『秘義分別撰疏』の考察(5)—」駒沢女子大学研究紀要・第11号所収、pp. 131-140

が認められるという見解が認められる。他方、唯識説は非仏説であるとの論に対しては、逆に声聞乗に非仏説の特質が存在するという反駁によって、「十種の説示 (daza-sthana)」という観点から逐一反論されたのである。しかしながらその VGPV の依って立つその根拠こそ、実は自派の主張する法解釈の重層性に再び求められていたのであった。当然唯識派の論理展開には難点が指摘され得ると自覚したためであろうか、これらに続いて Buddha-vacanatva、すなわち仏語性という仏説の本質論についてその特質を顕わにし、citta の様相が展開される仏典をも具体的に提示していた。そしてその上に饒益有情戒という利他の精神を明らかにすることによって声聞乗の立場を完膚無きまでに斥けようとするものであった。

そこで今回は以上の論理展開に潜む若干の問題点を指摘しながら、その後の試訳を提示することとする。

2. VGPV 試訳

凡 例

1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要なに応じて北京版を利用した。

Der. ed., No. 4052, Ri, 296-b-1~361-a-7
 : Tibetan Tripiṭṭaka, bstan 'gyur,
 preserved at the Faculty of Letters,
 University of Tokyo,
 SENMS TSAM Vol. 12, 通 帙 第
 236 (Ri)
 Pek. ed., No. 5553, Li, 356-b-7~434-a-8

- 2) 固有名詞ならびに通常音写語として用いられる術語は、カタカナ表記とする。
- 3) 本書のテキスト MS 中にて言及されている部分は、「 」によって示した。
- 4) 重要な術語は、()によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなかろうと思われる還元のサンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に ()によって示した。
- 5) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は []によって示した。
- 6) 典籍一般は、『 』によって示した。
- 7) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な文章箇所も []によって整え、敢えてそのままの表現を残した。

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 302-a-4, Pek. ed, No. 5553, Li, 363-b-1]

【1】「大菩提を成就すること」の意味

[MS における十種の論拠によって声聞乗と仏語性 (buddha-vacanatva) の欠如が明らかとなったことを受け、自己の立場(唯識派の主張)を成立*3せしめる論拠を示すならば、以下の通りである。]

聖なる [上品としての] 『般若波羅蜜 [多経]』などの経典は、大乘たるものとしては世尊のお言葉(教説)なのである。何故にといえ、[MS・序・第4節において]「大菩提を成就して (byang chub chen po kun du sgrub par byed pa ste)」と言われた意味を示しているからである。例えば、二派(小乗と大乘)のいずれにとっても、

*3 長尾雅人『撰大乘論』講談社・上巻、p. 70, 1.12によれば、声聞乗では同様の説示が見られても大菩提を引き起こすことがないので仏語性を欠如していると見る主張をいう。

一般に承認されているところの『本生経 (Jātaka)』等が示されたが如きである*4。[MS 第4節・第2偈末尾の]「認められる」といわれる言葉は、偈の中で述べられていることが、[この後に]説明することになる [内容と] 結びつけられるが故に、まだ成立していないというわけではない。[否、すでに成立しているのである。] 何故にといえば、大菩提を成就する意味を示そうと欲するからである、という趣旨である。「大菩提 (mahā-bodhi)」とは、ここでは「真如 (tathatā)」にして「無垢なるもの (amala)」である*5。「それ (大菩提) を成就する」ということは、眼前に [菩提が] 実現するということである。何故にといえば、一切知者 (thaMS cad mkyen pa、如来) の智慧が獲得されるべきだからである。「無住処涅槃 (a-pratiṣṭhita-nirvāṇa)」と三身 [説] (tri-kāya) が、ただ大菩提の段階だけ [に限定された] ものであるならば、一体、どのようにして大菩提を成就するというのであろうか。[この点について] いえば、[諸々の] 他人の [意識の] 相続*6 における法界等流*7 は、聴聞することが薫習 (習気) される、その

次第に基づいているのである*8。[法界等流という存在のあり方として] 「すべて [に円満している]」*9 とは、菩提の智慧であるといっても、しかしながら言葉をつまびらかに分析して関係づけられるべきである。およそ何であれ、これら (十種の道理) が大菩提を成就せしめるものであるならば、その [十種の道理が] 根拠となつて一切知 [者の] 智慧を獲得せしめるもの [となるの] である。

【2】大乘が仏語である理由

(その1) 3つの根拠

[Der. ed, 302-b-1] [また MS において] およそ「大菩提を成就する」といわれているすべての箇所はまた、「甚だ理に適ったこと」といわれることなどを三者の言葉によって限定し、特徴づけているのである。すなわち、そのうちで [最初に] 「甚だ理に適ったこと (sūpapanna)」といわれるのは、およそ何であれ、把握対象であることを本質とする大乘であるものならば、それらは「知られるべきものの拠り所」と、「知

*4 ジャータカでは六波羅蜜に通底する説示が頻繁に述べられているので用例としたものか。

*5 「真如 (tathatā) にして無垢なるもの (amala)」について、「無垢真如」および「無垢空性」として言及するならば、『中辺分別論 (Madhyānta-vibhāga-śāstra)』第1章第16偈、および第2章、第3章参照。

*6 MS 第9章および第10章にて言及されている。

*7 等流とは、因果関係において因に相似して果が連続的に出現することであるから、唯識では善因善果、悪因悪果、無記因無記果となる潜在余力を「等流習気」とか「名言種子」と表現する。故に「法界等流」とは、真如から衆生の機根に依じて等しく流れ出ることをいい、仏の教えの感化や教説そのものを指す。詳細は『手杖論』大正藏32、p. 506c 参照。

*8 法性としての法界は、常住として完璧に備わっていることを説得するために表現している箇所と思われる。

*9 底本では yod となっているので、「およそ存在するものは」とも訳せるが、文脈から yong とした。我々の分別を成立させている通俗的な言葉の概念を捨て、如来に基づく聞薫習によらなければならぬことをいう。

られるべきものの特質」と[を説くの]である。
[二番目の]「一致すること (aukūla)」といわれるのは、およそ何であれ、実践を本質とする大乘であるものならば、それらは「知られるべきものへの悟入」等としての六つのあり方[を説くの]である。何とならば、[六波羅蜜という]結果に付き従って一致するものであるからである。[三番目に]「矛盾のないこと (aviruddha)」*10といわれるのは、およそ何であれ、[結果を本質とする大乘であるものならば、「断じられること」と「慧の殊勝なるあり方」とである。何とならば、[結果が]原因と矛盾しないからである*11。

(その2) 三性説

またある観点によれば、「十種のあり方(道理)」が三自性の中に集約されているから、故に三自性を区別することによって「甚だ理に合ったこと(極めて適切である)」云々[と先述の三者の言葉が示された]のであり、すなわち[次の通りである]。その中、「甚だ理に合ったこと」とは、円成実[性のこと]である。何とならば、判断根拠には矛盾が無いからである。「一致すること」とは、依他起[性のこと]である。何と

ならば、清浄であることと一致するからである。「矛盾のないこと」とは、遍計所執[性のこと]である。何とならば、言説として矛盾がないからである。

(その3) 3つの認識根拠

またある観点によれば、「十種のあり方(道理)」がともに等しく直接知覚の認識 (pratyakṣa、現量) と合致するから「甚だ理に合ったこと」[といわれるの]である。また推論知覚の認識 (anumāna、比量) と合致するから「一致すること」[といわれるの]である。[また]先の仏陀の聖教による知覚の認識 (āpta-vacana、聖言量) とは矛盾しないから「矛盾のないこと」[といわれるの]である。

(その4) 清浄と雑染

またある観点によれば、「十種のあり方(道理)」が[直接知覚の認識(現量)と推論知覚の認識(比量)と仏陀の聖教による知覚の認識(聖言量)を伴うものであるから、「甚だ理に合ったこと」[といわれるの]である。清浄であることと一致するから「一致すること」[といわれるの]である。矛盾は雑染 (saṃkleśa) という敵対者

*10 ここでは(1)法性に違わないことをいうが、(2)仮に論典によって証明されなくても、隠された論典の意味があるということであり、(3)了義と未了義の文脈から理解すべきという見解が込められている。これらの点に関して本庄良文氏は、大乘の仏説論が有部の阿毘達磨仏説論に多くを負っていることを明かすために、①仏の直説でなくとも法性に叶えば仏説であるとの理論、②経の隠没の理論、③密意説(了義・未了義)の理論について、それぞれ阿含における典拠を検証されている。本庄良文「阿毘達磨仏説論と大乘仏説論一法性・隠没経・密意一」『印度学仏教学研究』第38号第1号、pp. 410-405参照。

*11 これら三つの言葉による限定づけにおいて、「甚だ理に合ったこと」とは論理的であって四種の道理 (yukti) に適合することであり、「一致すること」とは瑜伽行の実践に直接結びついていながら三種の認識手段 (pramāṇa) にも違背しないことであり、「矛盾のないこと」とは因果関係の前後矛盾がないことをそれぞれ意味すると『菩薩地』は注釈する。長尾前掲書・上巻、p. 69による。

(pratyamitra) となるから「矛盾のないこと」[といわれるの]である。

(その5) 三諦説

またある観点によれば、「[十種のあり方(道理)]」が三諦^{*12}の段階を特質として有する[その]諦(satya、真理)を主題としているから「甚だ理に適ったこと」[といわれるの]である。[また]勝義諦を主題としているから「一致すること」[といわれるの]である。世俗諦を主題としているから「矛盾のないこと」[といわれるの]である。

(その6) 三大阿僧企耶劫

またある観点によれば、「十種のあり方(道理)」が[三大阿僧企耶劫の分類から説明される^{*13}。すなわち初地に入る以前の信解行地にある人にとって]第一阿僧企耶劫(asamkhyeyakalpa)に基づいて集約されている[から]「甚だ理に適ったこと」[といわれるの]である。何となれば上地(upari-bhūmi)^{*14}と一致するからである。[また「一致すること」という言葉は、初地から第七地までにある人にとって]第二阿僧企耶劫に基づいて集約された[十種の道理の]ことが「一致すること」[といわれるの]である。何となれば、[彼らの]増上心(śraddhādhi-citta)が清浄なものとなったからである。[また「矛盾のないこと」という言葉は、第八地以上の高い地にある人にとって]第三阿僧企耶劫に基づいて集約された[十種の道理の]ことが

「矛盾のないこと」[といわれるの]である。何となれば、[彼らは]加行なき段階(非加行位)に入るからである。

(その7) 種姓

またある観点によれば、「[十種のあり方(道理)]」が本性として初めから存在する種姓(prakṛtistham gotram、本性住種姓)に基づいて集約されている[から]「甚だ理に適ったこと」[といわれるの]である。[また]修練によって完成させることの出来る種姓(samudānītam gotram、習所成種姓)に基づいて集約された[十種の道理の]ことが「一致すること」[といわれるの]である。[また]果の状態に基づいて集約された[十種の道理の]ことが「矛盾のないこと」[といわれるの]である。

【3】十種の殊勝なる道理の次第

(その1) 因と果

そこで^{*15}、[MS序文の第5節]において十種のあり方(道理)の次第は、正に説示し終わったのであって、すなわち、およそ何であれ把握対象(所縁)を自性とするものであるならば、それらは因であるから、[それ故に]最初に[MSにおいて]最初[の第1章と第2章]に説示されているのである。把握対象として如実に(所縁のままに)知られるべきもの[の特質]に悟入することなどの六者は、[すなわちMSの第

*12 典拠は不明。

*13 MS第5章第6節に対応する箇所。関連して長尾前掲書・下巻、pp.186-191参照。

*14 『俱舍論』によれば① upari-bhūmi ② ūrdhva-bhūmi となり、十地のうちの上方の階梯とか上界ということになるが、ここでは初地に登る前の地のことか。

*15 de la 'dir であるから、「この本文中にて」とも訳せるが、ここでは接続的に「そこで」と訳した。

3章から第8章であって、] 所(所知相)の果であるから、[それ故に所知相の]後に[説示されることに]なるのである。断と智の二つの殊勝なるものは、その[結]果であるから、それよりも更にその後に[MS第9章と第10章として説示されることに]なるのである。

[最初のMS第1章と第2章の内容である]把握対象(所縁)においても、前後[関係があることの意味]については、知られるべきことのよりどころが、[すなわちMS第1章アーヤ識が三自性説の]因であるから[順序として先に説示されるの]である。[そして]知られるべきものの特徴が、[すなわちMS第2章三自性説がアーヤ識の]果であるから[順序として後に説示されるの]である。「知られるべきものに悟入すること」などの六者[は、すなわちMSの第3章から第8章であって、それら]においてもまた、およそ何であれ、最初の三群であるところのもの(MS第3章から第5章)であるならば、それらは人間の[修行の]状況(avaṣṭhā、段階)によって特徴づけられるのであるから、初めに説示されるのである。二番目の三群、すなわち[MS第6章から第8章に示された、およそ]行を本質とするものは、そこ(MS第3章から第5章)に依存するものであるから、[それらの]後に説示されたのである。[更に]初めの群の三者についてもまた、およそ何であ

れ、最初のあり方として[示されている]二者(MS第3章と第4章)は、質量因(upādāna、取る側のもの)¹⁶であるから、[MS第5章よりも]先に説示されるのである。およそ三番目のあり方として[MS第5章]は、取られるべき[側の]もの(upādeya)¹⁷であるから、[MS第3章と第4章よりも]後[に説示されるの]である。最初のあり方(MS第3章から第5章)の中の二者(MS第3章と第4章)においてもまた、「知られるべきものに悟入すること」は因であるから、初め[に説示されるの]である。二番目のあり方[であるMS第4章]は果であるから、後に[に説示されるの]である。

[MS第5章から第10章に至るまでの六章のうち、第6章、第7章、第8章の3章にて説示されている三学(triṇi śikṣāṇi)の修習が]完成されていくこと(pratipatti)についてもまた¹⁸、所対治(vipakṣa)が粗大(audarika)であるままの順序にしたがって[修習の]階梯があるのである¹⁹。何とならば、破られた戒(dauḥṣilya、犯戒、乱戒)[に対して]は容易に検討しやすいから²⁰、より粗大であることによって、その[ために]対治(pratipakṣa)として「増上戒学(lhag pa'i tshul khriMS kyi bslab pa, adhiśīlam śikṣā)」が[MS第6章として]あるのである。同様に掉拳(uddhata)や動揺(visāriṇī, vikṣepa)など[が修習の把握対象]

*16 質量因(upādāna)として取る側のものの意味であるから、この場合、具体的には六波羅蜜のことを指す。

*17 取られるべき側のもの(upādeya)の意味であるから、この場合、具体的には十地のことを指す。

*18 VGPV, Der. ed, 298-b-7~299-a-1参照。ちなみに「完成されていくこと(pratipatti)」とは、「境行果」としての「行」を指す。

*19 所治には「麤」から「細」への次第があるという意味。

*20 つまり先述の把握対象についての観察や哲学的考察に比較すれば、自己の実際に犯した行為について、それらを戒律に照合させることは困難ではなく、そして反省する際には考えやすい事柄であるのだから、という意味。

であるから、それら粗大の対治として「増上心学 (lhag pa'i seMS kyi bslab pa, adhiccittam śikṣā)」が [MS 第7章として] あるのである。同様に深層心理に重く潜在している種子の連続^{*21} は微細であることによって、その[ために] 対治 (pratipakṣa) として「増上慧学 (lhag pa' i shes rab kyi bslab pa, adhiprajñam śikṣā)」が [MS 第8章として] あるのである。

(その2) 十地と三学

またある観点によれば、「[十種のあり方 (道理)] が十」地の順序による次第としての学 (śikṣā) である。何とならば、第二の地は「増上戒学」によって開示される (prabhāvitatvaṃ) のであって、そこ (大乘の立場) において戒波羅蜜 (śīla-pāramitā) が完全に成就されるからである。[さらに] 第三の地は「増上心学」によって開示されるのである。何とならば、[その第三地は] 世間の禪定 (bsam gtan, dhyāna) と三昧 (ting nge'i dzin, samādhi) と等至 (snyoMS par 'jug pa, samāpatti) によって住するところだからである。第四[の地] 等^{*22} は「増上慧学」によって開示されるのである。何とならば、[その第四地以降は三十七の] 「菩提分法 (bodhipākṣika)」[に一致しているので、これらを] 詳細に分析することによって住するところだからである。[MS 第9章の] 「断じること」と[MS 第10章の] 「智[慧]」の両者もまた、「四諦 (ārya

-satyāni catvāri)」の順序にしたがって示されるように次第が存在するのであって、というのも無住处涅槃 (mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa, apratiṣṭhita-nirvāṇa) は滅諦 (nirodha-satya) によって撰せられるが、その結果となる智慧とは、道諦 (mārga-satya) によって撰せられるのである。すなわち殊勝なる智は、「断じること」を先行条件とすることによって存在するのであるから、次第 [として] はそのように説示されるのである。 (未完)

3. VGPV 蔵文

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 302-a-4]

【1】

aphags pa shes rab kyi pha rol tu phyinpa la sogs pa'i mdo ni theg pa chen po nyid du sangs rgyas kyi gsung yin te. byang chub chen po kun du sgrub par byed pa'i don ston pa'i phyir gnyi ga la grags pa^{*23} skyes ba'i rabs kyi sde la sogs pa bstan pa bzhin No. 'dod do^{*24} zhes bya ba'i sgra tshigs su bcad pa las 'byung ba 'chad par 'gyur ba dang sbyor ba'i phyir ma grub pa nyid kyang ma yin te. byang chub chen po kun du sgrub par byed pa'i [Pek. ed, No. 5553, Li, 363-b-1] don ston par 'dod pa'i phyir yo zhes bya ba'i tha tshig

*21 gnas ngan len gyi sa bon rjes su 'brel pa は、dauṣṭhulya (雑染) であるから、悪性の潜在力 (悪習) の意味であり、麤習を指す。アーラヤ識に準ずる存在としてここでは位置づけられているので dauṣṭhulya と呼ばれる。袴谷憲昭「三種転依考」、『仏教学2』(平川彰 編) 山喜房仏書林、1976、pp. 46-76参照。

*22 ここでいう第四地以降の中に、十地まで入るのか意味が今ひとつ不明。

*23 grags pa…「極成する」の自動詞。

*24 'dod do…isyate、「認められている」の語については、MS 第4章第2節最終行を参照。

go. byang chub chen po ni 'dir de bzhin nyid dri ma med pa'o. de kun du sgrub pa ni mngon sum du byed pa'o. de ci'i phyir zhe na thams cad mkhyen pa'i ye shes thob par bya ba'i phyir ro. mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa tang sku gsum po byang chub po'i gnas skabs kho na yin na ji ltar byang chub chen po kun tu sgrub par byed pa yin zhe na rgyud^{*25} gzhan dgal chos kyi dphyings kyi rgyu mthun pa thos pa'i bag chags kyi rim gyis so. yod^{*26} ni byang chub ye shes yin mod kyi 'o na kyang^{*27} tshig phyi nas sbyar bar bya ste. gang gi phyir 'di dag byang chub chen po kun du sgrub par byed pa de'i phyir thaMS cad mkhyen pa'i ye shes thob par byed pa yin no.

【 2 】

① byang chub chen po kun [302-b-1] du sgrub par byed pa de yang shin tu 'thad pa^{*28} zhes bya ba la sogs pa tshig gsum gyis khyad par du byed de. de la shin du 'thad pa ni dmigs pa'i ngo bo nyid kyi theg pa chen po gang yin pa shes bya'ignas dang shes bya'i mtshan nyid de phyin ci ma log pa'i phyir ro. mthun pa ni

sbyod pa'i ngo bo nyid kyi theg pa chen pogang yin pa shes bya la 'jug pa la sogs pa rnam pa drug^{*29} ste. 'bras bu'i rjes su mthun pa'i phyir ro. 'gal ba med pa ni 'bras bu'i ngo bo nyid kyi theg pa chen po gang yin pa spangs pa^{*30} tang ye shes kyi khyad par gyi ngo bo ste. rgyu tang mi 'gal ba'i phyir ro.

② rnam pa gcig tu na rnam pa bcu po ngo bo nyid gsum gyi nang du 'dus pa'i phyir ngo bo nyid gsum gyi dbye bas shin tu 'thad pa la sogs pa yin te. de la shin tu 'thad pa ni yongs su grub pa ste. tshad ma dang mi 'gal ba'i phyir ro. mthun pa ni gzhan gyi dbang ste. rnam par byang ba dang mthun pa'i phyir ro. 'gal ba med pa ni kun brtags pa ste. tha snyad dang mi 'gal ba'iphyir ro.

③ rnam pa gcig tu na rnam pa bcu char^{*31} mngon sum^{*32} gyi tshad ma dang ldan pa'i phyir shin tu 'thad ba'o. rjes su dpags pa^{*33} dang ldan pa'i phyir mthun pa'o. sngon^{*34} gyi sangs rgyas kyi lung dang mi 'gal ba'i phyir 'gal ba med pa'o.

④ rnam pa gcig tu na mngon sum dang rjes su dpag pa dang lung rnams^{*35} dang ldang

*25 samtāna は連続する個人の意識存在であり、接続体のこと。相続。

*26 yod…yong

*27 mod kyi 'o na kyang…kim tu

*28 'thad pa…「合理」、「适当」の自動詞。

*29 drug…ṣaṭ-pāramitā

*30 spangs pa…prahāṇa、「断」、「捨」の自動詞。

*31 char…bcar in Pek ed、ここは他動詞にしたがわず、ひとまず「十種の道理」に関して、その「いずれがともに」の意味として訳した。

*32 mngon sum…pratyakṣa

*33 rjes su dpags pa…anumāna

*34 sngon…pūrva

*35 lung rnams…āgama

pa'i phyir shing tu 'thad pa'o. rnam par byang ba^{*36} dang mthun pa'i phyir mthun pa'o. 'gag ba kun nas nyon mong pa'i^{*37} dgra bor^{*38} gyur pa'i phyir 'gal ba med pa'o.

⑤ rnam pa gcig tu na bden pa gsum gyi skabs kyi mtshan nyid kyi bden pa'i dbang du byas nas shin tu 'thad pa'o. don dam pa'i bden pa'i^{*39} dbang du byas nas mthun pa'o. kun rdzob kyi bden pa'i^{*40} dbang du byas nas 'gal ba med pa'o.

⑥ rnam pa gcig tu na rnam pa bcu po bskal pa grangs med pa^{*41} dang pos bsdus pa ni shin tu [Der ed. 303-a-1] 'thad pa ste. sa gong ma^{*42} dang mthun pa'i phyir ro. bskal pa grangs med pa gnyis pas bsdus pa ni mthun pa ste. lhag pa'i bsam pa^{*43} rnam par dag pa'i phyir ro. bskal pa grangs med pa gsum pas

bsdus pa ni 'gal ba med pa^{*44} ste. mngon par 'du bya ba med par^{*45} 'jug pa'i phyir ro.

⑦ rnam pa gcig tu na rang bzhin du gnas pa'i^{*46} rigs kyi bsdus pa ni shin tu 'thad pa'o. yang dag par bsgrub pa'i rigs^{*47} kyi bsdus pa ni mthun pa'o. 'bras bu'i gnas skabs kyi bsdus pa ni 'gal ba med pa'o.

【 3 】

① de la 'dir gnas bcu bo 'di dag gi go rigs^{*48} ni bstan zin pa nyid^{*49} de. dmigs pa'i ngo bo nyid gang yin pa de ni rgyu yin pa'i phyir dang por bstan to. dmigs pa^{*50} ji lta ba bzhin shes bya la 'jug pa la sogs pa drug ni de'i 'bras bu yin pa'i phyir phyis so. spongs pa dang ye shes kyi khyad par dag ni de'i 'bras bu yin pa'i phyir de bas kyang^{*51} phyis so. dmigs pa dag la yang snga phyi ni shes bya'i gnas ni rgyu

*36 rnam par byang ba…pariśuddhi, pariśodhana

*37 kun nas nyon mong pa…samkleśa

*38 dgra bo…pratyamitra

*39 don dam pa'i bden pa…paramārtha-satya

*40 kun rdzob kyi bden pa…loka-saṃvṛtti-satya

*41 bskal pa grangs med pa…asaṃkhyeya-kalpa

*42 sa gong ma…① upari-bhūmi ② ūrdhva-bhūmi、あるいは gong ma は① utara ② upari か明確でない。

*43 lhag pa'i bsam pa…adhicitta

*44 'gal ba med pa …an-ābhogika

*45 mngon par 'du bya ba med pa…an-abhi-saṃskārā, 非行あるいは非有行と訳されるこの語は、平等の理さえ覚り終われば、なすべき修行は何もない無所作の状態をいう。『無量寿経』T12, p. 271-b 参照。

*46 rang bzhin du gnas pa…prakṛti-stham gotram, VGPV, Der ed. 298-c-7参照。

*47 yang dag par bsgrub pa'i rigs…samudānītam gotram.

*48 go rigs…go rim in Pek ed.

*49 nyid…eva か。

*50 dmigs pa…ā-lambana

*51 de bas kyang…tat api

yin pa'i phyir ro. shes bya'i mtshan nyid ni 'bras bu yin pa'i phyir ro. shes bya la 'jug pa la sogs pa drug la yang gsum tshan dang po gang yin pa de ni gang zag gi gnas skabs*⁵² kyis rab tu phye ba yin pa'i phyir dang por bstan to. gsum tshan gnyis pa spyod pa'i ngo bo nyid ni de la brten pa yin pa'i phyir phyis bstan to. gsum tshan dang po la yang rnam pa dang po gnyis gang yin pa de ni nye bar len pa*⁵³ yin pa'i phyir sngar bstan to. rnam pa gsum pa gang yin pa de ni nye bar blang bar bya ba*⁵⁴ yin pa'i phyir phyis so. rnam pa dang po gnyis la yang shes bya la 'jug pa ni rgyu yin pa'i phyir dang por ro. rnampa gnyis pa ni 'bras bu yin pa'i phyir phyis so. sgrub pa*⁵⁵ la yang mi mthun pa'i phyogs*⁵⁶ ji ltar rags pa*⁵⁷ bzhin go rims yin te. 'di ltar 'chal

pa'i tshul khrims*⁵⁸ ni brtag*⁵⁹ sla ba'i phyir ches rags pas de'i gnyen por*⁶⁰ lhag pa'i tshul khrims kyi bslab pa'o*⁶¹. de bzhin du rgod pa*⁶² dang rnam par gyeng ba*⁶³ la sogs pa rags pa*⁶⁴ de dag gi gnyen por lhag pa'i sems kyi bslab pa'o*⁶⁵. de bzhin du gnas ngan len*⁶⁶ gyi sa bon rjes su 'brel pa ni phra bas de'i gnyen por lhag pa'i shes rab kyi bslab pa'o.

② rnam pa gcig tu na sa'i rim pas go rims su bslab pa yin te. 'di ltar sa gnyis pa ni lhag pa' i tshul khriMS kyi bslab pas rab tu phye ba yin te*⁶⁷. de la tshul khrims kyi pha rol tu phyin pa*⁶⁸ yongs su rdzogs pa'i phyir ro. sa gsum pa ni lhag pa'i sems kyi [Der ed. 303-b - 1] bslab pas rab tu phye ba yin te. 'jig rten pa'i bsam gtan*⁶⁹ dang ting nge 'dzin*⁷⁰ dang snyoms par 'jug pas*⁷¹ gnas pa'i phyir ro. bzhi

*52 gnas skabs...avaṣṭhā

*53 nye bar len pa...upādāna

*54 nye bar blang bar bya ba...upādeya

*55 sgrub pa...pratipatti

*56 mi mthun pa'i phyogs...vipakṣa

*57 rags pa...audārika

*58 'chal pa'i tshul khrims...dauḥṣīlya

*59 brtag...anuyoga

*60 gnyen po...pakṣa

*61 lhag pa'i tshul khrims kyi bslab pa...adhiśīlaṃ śīkṣā

*62 rgod pa...uddhata, uddhava

*63 rnam par gyeng ba...visāriṇī, vikṣepa, visāra

*64 pa...pas

*65 lhag pa'i sems kyi bslab pa...adhicittaṃ śīkṣā

*66 gnas ngan len...dauṣṭhulya

*67 phye ba yin te...prabhāvitatvaṃ

*68 pha rol tu phyin pa...pāramitā

*69 bsam gtan...dhyāna

*70 ting nge 'dzin ... samādhi

*71 snyoms par 'jug pas...samāpatti

pa la sogs pa ni lhag pa'i shes rab kyi bslab
pas rab tu phye ba yin te. byang chub kyi
phyogs dang mthun pa la sogs pa^{*72} rab tu
rnam par 'byed pas gnas pa'i phyir ro. spangs
pa dang ye shes dag kyang bden pa ji ltar
bstan pa bzhin go rims yin te. 'di ltar mi gnas
pa'i mya ngan las 'das pa^{*73} ni 'gog pa'i bden
pas^{*74} bsdus pa yin la de'i 'bras bur gyur pa ye
shes ni lam gyi bden pas^{*75} bsdus pa yin te. ye
shes kyi khyad par ni spangs pa sngon du 'gro
ba can yin pa'i phyir go rims de ltar bstan to.
[Der ed. 303-b- 3] (2005年10月28日脱稿)

*72 byang chub kyi phyogs dang mthun pa la sogs pa···bodhi-pakṣa

*73 mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa···a-pratiṣṭhitā-nirvāṇa

*74 'gog pa'i bden pa···nirodha-satya

*75 lam gyi bden pa···mārga-satya